

文部科学大臣賞

シロツメグサの約束

宮城県 宮城県農業高等学校三年 加藤 麻友

見たことも無い黒い濁流が押し寄せてくる。彼女は恐怖で振り返ることも出来ず、ただひたすら走り続けた。人や車、全てを飲み込む自然の脅威に怯えながら。その手には一本のシロツメグサが握られていた。

今から十一年前、私は一人の少女と出会った。友達もできずに一人泣く私に

「ゆり組の子？一緒だ。」

と微笑みながら声をかけてくれたのはリンちゃんだ。私達はすぐに馴染み、幼稚園の中でも一番の親友になった。

小学生に上がると学区の違いから列々の学校になったが、放課後や休日には公園で待ち合わせをして鬼ごっこをした。特に大好きだったことはシロツメグサを摘み、王冠を作ってお姫様ごっこをすることだった。

ある日、リンちゃんが

「大人になっても一緒にいようね。」

と言うと私も

「うん。約束だよ。」

と白い王冠を交換した。この約束が果たせなくなるとは、この時知る由もなかった。

二〇一一年三月十一日。忌まわしき日を迎えることになる。教室で帰りのホームルーム中。地中を何が蠢く様な不気味な轟音が聞え、途端に激しい揺れに襲われた。割れたガラスが床に叩きつけられ、ロッカーは踊り揺さぶられ、校庭の地面は割れていた。悲鳴と泣き声が響く教室の中、私は「死にたくない」と叫ぶ友人をなだめていた。東日本大震災の発生である。私の家は倒壊することは無かったが、地元の死者数は千人を超え、人口に対する死亡割合が最も高い街になった。

落ち着きを取り戻したある日、
「リンって津波に流されて死んだよ。」

と友人が語りだし、目の前が真っ暗になった。受け入れ難く、呆然と立ち尽くした。続けて言葉を選ぶようにゆっくりとあの日のことを話してくれた。

震災当日、リンちゃんは風邪をひいて学校を休んでいた。地震発生後、近所のおばさんが迎えに来て、二人は避難を始めた。しかし、避難所の仙台空港に到着する前に津波に襲われた。見たことも無い黒い波の恐怖が迫ってくる風景。それが、彼女が最後に見たものだった。漂流し続け、変わり果てた姿で歩道橋に引っかかっていたそうだ。

そこから私の時は止まり、胸が締め付けられるように苦しくなった。どれだけの恐怖を感じたのだろう。私は

「知らなかった。約束を守れずに私が生きていくなんてできない。」

と言うと、友人は
「ふざけるな。リンの分まで生きてみるくらい言ってみてよ。」

と激昂した。返す言葉も無く、自分の無力さと悔しさで声を上げて泣き続けた。その日を境に、私は口

数が減り、彼女が発見された歩道橋を自然と避けるようになった。

時は流れ私は高校生になった。被災地の瓦礫は無くなり、住宅が建設され、人々の生活は元の姿に戻りつつある。そんな時、私はクラブ活動で彼女の遺体があった場所に来ていた。久しぶりに目にする歩道橋に差し掛かると、胸が締め付けられた。目を下に背けると足元にはシロツメグサが咲いていた。忘れようとしていたあの記憶が蘇る。王冠を作り、二人が交わした約束。そう、リンちゃんはずっと歩道橋で私を待っていた。二人の約束を花に託して伝えてくれた。その瞬間、傷つくことを避け、彼女を失った悲しみから逃げていた自分の弱さに気が付いた。私は「ごめんね」と言い、シロツメグサに手を合わせた。この日から、大切な親友を奪い憎かった津波と向き合い、約束に恥じぬように、彼女の分も生き抜くことを決意した。

私達のような悲しみを増やしたくないと思い、二人のエピソードを紙芝居にして語り部活動を始めた。多くの人に津波の恐ろしさと命の大切さを伝えたい。初めは人前で自分の想いを物語で伝えることは難しかったが、喋るスピードに抑揚をつけ、声を変え

て必死に伝えた。今では感情を込めた表現力を身に付けた。地道な活動は実を結び、噂を聞きつけた東京の高校生五十名が私の紙芝居を聞きに会いに来てくれた。話が終わると何人も目に涙を浮かべ

「大切な人を亡くした人のリアルな話を聞けて、災害への心構えを改めました。」
と言ってくれた。

被災地には新たな課題がある。それは、復興によって、整備されることで震災の恐ろしさが伝わり辛くなった。語り部をしているとその変化を如実に感じる。しかし、諦めないことが力になることを彼女が教えてくれた。だから、私は彼女の想いと共に未来へ進むことができる。

私は卒業しても語り部活動を続けていく。紙芝居の中で彼女は色あせること無く、永遠に生き続けることができるはずだ。私は彼女と共に生きていく。これが、私達の新しい約束。

ようやく、晴れ渡った空と私の心。今日も明日も一緒にシロツメグサの咲く未来を描き続け、伝えていこう。沢山の笑顔の二人で一步を踏み出す。

